

原著論文

私の大学環境教育実践を振り返る
—なぜ「フィールド環境教育学」をくだかけ生活舎で行うか？—

原子 栄一郎

東京学芸大学環境教育研究センター

**Reflection on My Environmental Education Practice in a University:
Why do I Conduct a Course “Field Environmental Education”
in Kudakake Seikatsu-sha?**

Eiichiro ‘Atom’ Harako

Field Studies Institute for Environmental Education, Tokyo Gakugei University

This study is to reflect on environmental education practice I am engaged in in a university. “Field Environmental Education,” which is the last of the three consecutive courses I teach on environmental education is scrutinized by answering my own three questions: 1) what does the course assume? 2) what activities do I do in it? and 3) why do I conduct it in a particular place? That place chosen is Kudakake Seikatsu-sha (Kudakake Life Home), which is a place for communal life in a remote area to enjoy simple rural life.

The purpose of the course is for the participants to consider their previous understandings of environmental education to deliberate what environmental education is again. I conclude that Kudakake Seikatsu-sha is an ideal field for the course because its location and some significant experiences there enable them to engage themselves in that task. These experiences include 1) composite and comprehensive environmental education activities, 2) farming-based simple rural life on which the first kind of experience is founded, and 3) “the world of life,” in which both joys and sorrows are rejoicing.

Key Words: “Field Environmental Education”, Kudakake Seikatsu-sha, reflection on environmental education practice, “the world of life”

I. はじめに

2000年代半ばから、私は、環境教育研究に関する自分の問題意識の変遷を、特に英語圏環境教育研究界の動向と対照させて跡づけることを通して、環境教育とは本当は何かを考えている¹⁾。環境教育研究を巡る自己反省の一環として、この小論では、私が大学で行っている環境教育の授業実践を考察の対象とし、実践を振り返って、なぜそのようにやるのかを自問自答する。

取り上げる実践は、東京学芸大学教育学部教養系で担当する授業科目「フィールド環境教育学」である。この科目は、環境総合科学課程環境教育専攻3年生を対象とする選択必修の1つである。春学期中に演習形式の座学を行い、夏季休暇中に宿泊を伴うフィールドスタディを実施している。

私の教育実践を振り返る方法は自問自答である。以下の問いを順次発しながら考察し、論述を進める。

- ① 授業が前提にするのは何か？
- ② どのような教育実践を行っているか？
- ③ その教育実践をなぜ特定の場所で行うか？

II. 授業が前提にするのは何か？：現代環境教育の課題

私は、学部で3つの環境教育に関連する科目を担当している。科目を通底する基本的な考えは、環境教育とは何かを深く考えることと、現代の環境教育が担うべき課題に応答することである。この後に述べるように、前者と後者は不可分の関係にある。では、現代環境教育の課題とは何か。

現代環境教育の世界標準はESD (education for sustainable development) である。日本国内においては、中央環境審議会 (1999) ならびに環境庁 (2000) によれば、これからの環境教育・環境学習は、「環境のための教育・学習」から「持続可能な社会の実現のための教育・学習」にまで広げて捉えるべきだとされている。ここで言う「持続可能な社会の実現のための教育・学習」とは、今日、ESD と呼ばれるものである。国際社会においては、2005年から2014年までを「国連ESDの10年」とする決議案が国連総会で採択され、ユネスコを主導機関とする国際共同取り組みが展開されている。

ユネスコの公式ウェブサイトから、ESD という現代環境教育の要点を明らかにす

る。ESDを解説するページには、次のように記されている。持続可能な開発に必要な不可欠な教育を含めて、現在、私たちが所持する知識基盤には、持続可能な開発が要請される地球的規模の複雑な問題群を解決する策は含まれておらず、このような事態にあつて、「ESDは、持続不可能な社会を現在支えている教育プログラムとシステム（方法および内容）を考え直そう（rethink）という努力を促進する」²⁾（下線は筆者による）。

中央環境審議会がESDの起点とするのは、国連環境開発会議（1992）である。会議で採択された『アジェンダ21』の第36章「教育、意識啓発及び訓練の推進」には、「教育」の課題は「持続可能な開発の方へ教育の向きを変えること（reorienting）」³⁾（下線は筆者による）と記されている。

ESDに関するこの2つの公式声明を踏まえるならば、ESDの要点は教育を考え直し教育の向きを変えること、と私は理解する。背景にあるのは、持続可能な開発という理念および行為であり、それによって実現される持続可能な発展と社会というビジョンである。

現代環境教育の課題は、教育の再考と再定位である。環境教育の課題として教育を再考し再定位するということは、取りも直さず環境教育とは何かを考えることである。先に述べたように、環境教育とは何かを問うことと現代環境教育の課題は、密接な関係にある。この課題に応答することは、環境教育者の責務だと私は受け止める。では、この課題にどのように取り組むか。

Ⅲ. どのような教育実践を行っているか？：「フィールド環境教育学」

1. 環境教育関連授業科目の構想と構成

現代環境教育の課題に大学で取り組むとするならば、授業が1つの場となる。まず、私が担当する環境教育関連授業科目の構想と構成について説明する。担当するのは、「環境教育基礎学」、「環境教育実践学」、「フィールド環境教育学」の3つである。いずれも環境教育専攻生を対象にしており、前の2つは必修、後の1つは選択必修である。開設学期は、それぞれ2年生秋学期、3年生春学期、3年生春学期および夏季休暇中である。これらの科目は3つで1つのセットをなしている。学生は、順次、履修することによって、環境教育の基本から基礎・基盤へ、基本的な考えから実践へと学習を進める。「フィールド環境教育学」は選択必修科目なので、実際

に3つの授業科目を連続して履修する学生は、専攻全体の2割程度である。

3つの科目のねらいと目標および内容を、2013年度シラバスから記す(表1参照)。

表1 担当する環境教育関連授業科目のねらいと目標および内容

	環境教育基礎学	環境教育実践学	フィールド環境教育学
ねらいと目標	今日の法制化された環境教育の基本を、その最新動向を踏まえながら理解した上で、環境教育の拠って立つ土台(基礎と基盤)に立ち返って「環境教育とは何か?」を考える。授業参加者は、学期末に環境教育に関する自分の考えを「環境教育私論」に論述することを目指す。	「環境教育を実践するとはどういうことか?」を一人一人が、またクラス全体で問い続ける。授業参加者は、この問いに対する自分の考えを、学期末に「環境教育実践私論」に論述することを目指す。	これまでに「環境教育基礎学」や「環境教育実践学」で学んだ環境教育を、フィールドで身体全体を使って体験的にもう一度学び直す。
内容	まず、自己発見的方法によって環境教育の基本を理解する。その上で、今日の環境教育の到達点を公的文書を通して把握し、その地点から、そもそも環境教育とは何か?を探究し、環境教育をもう一度学び直す。授業は、個人ワーク、グループワーク、クラスワーク、講義を織り交ぜて行う。	まず、環境教育実践の基本的な枠組みについて理解する。次に、環境教育実践の基礎となる主要な考えと、それを具体化した教育実践の事例について学ぶ。その上で、「環境教育基礎学」で学んだ環境教育の拠って立つ土台に立ち返って、環境教育実践のそもそものあり様を探求する。	夏期休暇中に四泊五日の合宿型集中授業を行う。事前に集中授業に関する座学を行う。

前章で触れたが、この3つの授業科目を通底する基本的な考えは、環境教育とは何かを深く考えることである。深く考えるということ、私は、シラバスでは環境教育の「基本」、「基礎」、「基盤」という3つの言葉を使って表現している。環境教育の「基本」とは、環境教育という名前と呼ばれる教育について問い、考えるために知っておかなければならない必要最小限の事柄である。これによって、例えばウィキペディアで、「環境教育(かんきょうきょういく)とは、環境や環境問題に対する興味・関心を高め、必要な知識・技術・態度を獲得させるために行われる教育活動のことである。人間の全体に関わる問題として、学校以外でも様々な活動が行われている。」⁴⁾と説明される環境教育について、一定の理解を持つことができると考えられる。環境教育の「基礎」とは、「基本」で理解した様々な活動形態を伴う環境教育の前提にあつて、環境教育を成立させるもとになっている考えのことである。「基盤」とは、様々な形態を取り得る個別の環境教育を包括する、環境教育という教育の大本にある考えのことである。

図1は、環境教育を1つの建物にたとえて、その「基本」、「基礎」、「基盤」を表したものである。「基本」は建物本体・構造、「基礎」は建物の土台、「基盤」は建物を据える大本の土地・地盤に相当する。図の右にある表は、環境教育の「基本」、「基礎」、「基盤」に対応する環境教育に関する学習の位相を表している。「基本」は環境教育に関する知識を習得し理解する学習、「基礎」は習得した知識を反省する学習、「基盤」は環境教育を存立させている知識を1つのまとまりとして吟味し再考する学習を示している。

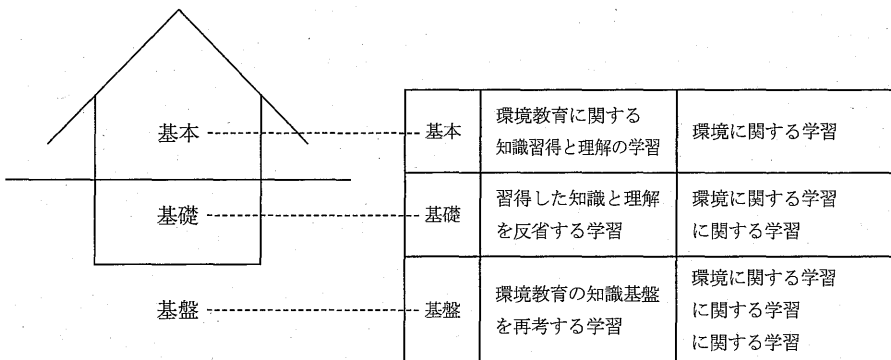


図1 環境教育の基本・基礎・基盤と学習の関係

環境教育とは何かを深く考えることとは、環境教育について「基本」から「基礎」そして「基盤」へと掘り下げて思考することであり、「基盤」へと到達したならば、その知見を用いて、「基礎」と「基本」に遡ってそこで理解した事柄を捉え直して検討することである。担当する環境教育関連授業科目において、私はこの往還の学習過程を大切にしている⁵⁾。

2. 「フィールド環境教育学」の概要

「フィールド環境教育学」は、「環境教育基礎学」および「環境教育実践学」の必修2科目を履修した後に選択する科目である。履修者は、必修科目それぞれの最終課題として、「環境教育私論」ならびに「環境教育実践私論」を論述している。そこに書き記された各自の環境教育の理解を、フィールドで行ういろいろな体験活動を通して捉え直し、環境教育とは何かをもう一度考え直すことを、「フィールド環境教育学」は目的にしている。必修2科目は、個人ワークとグループワークを中心に講義を織り込んだ座学であるが、「フィールド環境教育学」は、肉体作業を中心にして現場で行う実地体験学習である。その眼目は、自分の身体を丸ごと使って体験し、その体験を反省し、他人事ではなく自分のこととして環境教育とは何かを問い直すことにある。実地の部分は夏季休暇中に4泊5日の集中形式で実施する。それに先だって、学期中に数時間の事前学習を行う。

2013年度に行った授業実践について述べる。2013年度は履修生がゼミ生であったため、座学はゼミ活動の一環で行い、フィールドスタディを9月25日(水)から9月29日(日)まで実施した。フィールドは、神奈川県足柄上郡山北町共和地区にある「くだけけ生活舎」である。

くだけけ生活舎は、特定非営利活動法人くだけけ会の共同生活の場である。くだけけ会のウェブサイトの情報から、会の概要を記す。くだけけ会の前身は、現在の代表である和田重良氏の父・重正氏が小田原に設立した、生活を中心に据えた寄宿型青年教育の「はじめ塾」にある。そこでは師弟が寝食を共にしながら互いに学び合い、共同生活が営まれた。1967年に場所を丹沢山中に移し、青少年の生活道場「一心寮」(現在のくだけけ生活舎)が開かれた。1985年には、不登校の子どもたちの居場所として「くだけけ寮」が併設され、1993年に「くだけけ生活舎」となった⁶⁾。

くだけけ会は2005年に特定非営利活動法人になったが、その前身は、1978年に

発足した「家庭教育を見直す会」にある。この会は、和田重正氏の他、当時の教育界の指導者であった周郷博氏、伊藤隆二氏等の提唱によって設立された。30年以上にわたって家庭教育の諸問題に取り組み、「あんしん」をキーワードに、「同行教育」や「人生科」⁷⁾を提唱し実践している⁸⁾。

図2は、「あたたかい人間社会を創造する」⁹⁾ことを目指すくだけかけ会の活動全体を示したものである。

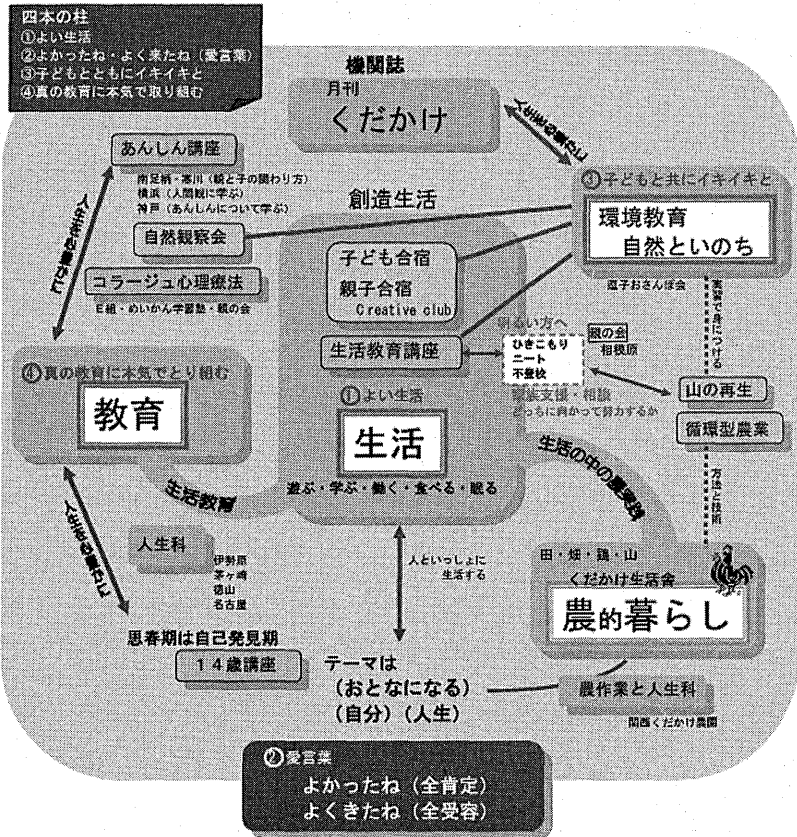


図2 くだけかけ会の活動全図 (<<http://www17.ocn.ne.jp/~kudakake/katudou.html>>から転載)

「フィールド環境教育学」のフィールドであるくだけけ生活舎では、子ども合宿や親子合宿などの創造的生活体験活動、自然観察会などの環境教育活動、有機農業や山の手入れ作業などの環境保全活動が行われている。このような活動に取り組む生活舎はどのような場所だろうか。

くだけけ生活舎は西丹沢大野山の中腹、標高 450m の所にあります。皆瀬川の谷を挟んで向こう側に丹沢の山々が連なり、相模湾も少し見える、四季折々に美しい場所です。美味しい空気の中で無農薬の美味しい野菜を作ったり、薪で風呂を焚くなど、「手足を動かして行動する」ことを大切にしています。現代の文化的生活でどうしても抜けてしまいがちな、人間が人間らしく生きていくのに大切な体験が沢山できます¹⁰⁾。

最寄りの JR 山北駅から歩いて 1 時間半。車だと、皆瀬川沿いのアスファルト道からはずれて、曲りくねった細い山道を 15 分ほど上る。最後の 5 分は、舗装されていないガタガタ道である。近くの民家までは、電灯のない道を 15 分ほど歩く。少し開けた傾斜地に、古民家と、かつてここで寮生活を送った若者たちが建てた 2 階建て家屋が渡り廊下で結ばれて立っている。「フィールド環境教育学」を行う私たちは 2 階建て家屋で寝起きし、古民家で食事や入浴する。全真堂（正座し瞑想する場）と納屋が敷地に点在する。緩やかな斜面の空き地に開墾畑があり、その端に鶏小屋が立っている。周りは山ばかりである。

限界集落の最奥地にあるくだけけ生活舎。そこで、「現代の文化的生活でどうしても抜けてしまいがちな、人間が人間らしく生きていくのに大切な体験」をするのが「フィールド環境教育学」である。

くだけけ生活舎の一日は、次の日課を基本にして進む。

- 6 : 00 起床
- 6 : 15 ~ 6 : 30 正座
- 6 : 30 ~ 7 : 00 朝の仕事（掃除、朝食の準備、犬の散歩、鶏の世話など）
- 7 : 00 ~ 8 : 00 朝食と片付け
- 8 : 00 ~ 9 : 00 自由時間

- 9:00~12:00 朝の仕事
12:00~13:00 昼食（昼食当番は、時間前に食事の準備）
13:00~16:30 午後の仕事（午後3時頃に休憩）
16:30~18:00 夕方の仕事（犬の散歩、風呂焚き、薪割り、夕食の準備など）
18:00~19:30 夕食、団欒
19:30~22:00 入浴、自由時間
22:00 就寝

くだけけ生活舎は、くだけけ会の代表でありくだけけ生活舎の主宰者である和田重良氏家族（現在は2世代5人）の住まいでもある。私たち「フィールド環境教育学」参加者は、期間中、和田氏家族と一緒に生活する。寝起きする場所が違っただけで、和田家と一緒に寝食を共にし、一緒に仕事をする。炊事、掃除、風呂焚き、薪割り、犬の散歩、鶏の世話は、和田家の日課であり、それを私たちは「フィールド環境教育学」の活動と称して体験する。くだけけ生活舎を紹介する言葉、「美味しい空気の中で無農薬の美味しい野菜を作ったり、薪で風呂を焚くなど、『手足を動かして行動する』ことを大切にしています。現代の文化的生活でどうしても抜けてしまいがちな、人間が人間らしく生きていくのに大切な体験」は、和田家の日常の出来事、普段の生活である。和田家にとっては平生の当たり前のことを、私たちは特別の非日常の出来事として体験するのである。

くだけけ生活舎の日課を基軸にして、4泊5日の集中授業は進行する。その概要は表2の通りである。仕事の中心は農作業である。2013年度は、くだけけ生活舎の周りにある開墾畑で、夏野菜の最後の収穫、畑の手入れ、種蒔きの準備、冬野菜の苗の定植をしたり、収穫した野菜の配送準備をしたり、市街地にある畑でサツマイモ掘り、はざかけ用の竹の切り出しなどを行った¹¹⁾。

くだけけ生活舎は、厳しい環境条件のもとで完全無農薬・無化学肥料栽培の野菜づくり、米づくり、自然養鶏の農業を営んでいる。そのモットーは、「見事にネットする鶏・畑・田んぼ・そして人間」である。この農業の担い手である和田一良氏（重良氏の息子）は、「畑や田んぼの道の草は・『取れば卵に、取らねば雑草。』／人間の出す残飯は・『やれば鶏エサ、やらねばゴミ。』／鶏フンは・『畑に入れば肥料、捨てればフン。』」と表現している。鶏・畑・田んぼ・人間の間のこの相互連関

的「循環型システム像」¹²⁾(図3)を、農業の全くの素人である私たちは、数日間の農作業と農的暮らしの集中的体験を通して、理屈やイメージではなく身体で実感するのである。

表2 2013年度「フィールド環境教育学」集中授業日程

	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
午前	国分寺駅集合、昼前に生活舎到着、卵磨き	農作業	卵磨き、農産物発送準備	「農場こぶた畑」で農場整備	振り返り
午後	オリエンテーション、生活舎見学、鶏の世話、農作業	農作業	農産物発送準備、農作業	農場整備、豚の世話	昼食後、生活舎を離舎、山北駅解散
夜	自由時間	自由時間	自由時間	自由時間	

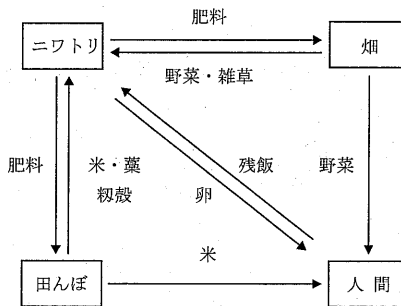


図3 くだけけ生活舎の農の循環型システム像

(<http://oyamanotamago.web.fc2.com/kodawari.htm>)を元に筆者が作成

IV. その教育実践をなぜ特定の場所で行うか? : くだけけ生活舎

3つ目の問いは、この小論の主題をなす。

私が担当する3つの授業科目は、現代環境教育の課題である教育について考え直し、その向きについて考えること、それは取りも直さず環境教育とは何かを問うこと、この課題に回答すべく構成されている。シリーズで提供する3つの科目の最後が「フィールド環境教育学」である。その目的は、「これまでに『環境教育基礎学』や『環境教育実践学』で学んだ環境教育を、フィールドで身体全体を使って体験的

にもう一度学び直す」ことにある。この目的を達成するための生命線は、どこで「フィールド環境教育学」をやるかである。どこでもよい訳ではない。それにふさわしい場所がある、と私は考える。私が選んだのはくだけけ生活舎である。なぜ、くだけけ生活舎か。

まず言えることは、くだけけ生活舎は、いわゆる環境教育を体験するのに適した場所だということである。そこがどのような場所であるかは先に少し述べたが、くだけけ会は、くだけけ生活舎で自然観察会を開いたり、子ども合宿を行ったり、循環型農業や山の手入れ作業あるいは農的な暮らしの体験コースを提供している。つまり、くだけけ生活舎では、環境教育活動、野外体験活動、環境保全活動、環境配慮型生活を、くだけけ会の企画プログラムとして体験することができる。このようなプログラムは、他の環境教育関連施設でも体験することができる。しかし、くだけけ会のそれは、環境教育に関係するこれらの活動をどれか一つだけではなく、また個々ばらばらにではなく、生活舎に滞在することによって複合的・総合的に体験することができる。そこに、くだけけ生活舎の環境教育体験の特徴があり、「フィールド環境教育学」にとっての利点がある。そのような体験を通して、大学で学んだ環境教育をもう一度学び直すことができる、と私は考える。

複合的・総合的であることに加えて、くだけけ生活舎における環境教育体験のもう一つの重要な特徴は、その体験が生活舎の農的暮らしに根ざしていることである。しかもその暮らしは、和田家の毎日の通常の営みである。何か特別に用意されたことではなく、日々、淡々と繰り返されている。私たちが名づけて環境教育体験と呼ぶ活動は、生活舎に暮らす和田家の日常的営みである。訪問者である私たちは、そこに迎えられる。そして、「よく来たね（全受容）」、「よかったね（全肯定）」というくだけけ会の「愛言葉」¹³⁾を掛けられる。それは、生活舎における共同生活の大切な一員として受け入れられたことを意味する。この言葉を受けて、私たちはくだけけ生活舎の農的暮らしを始め、一時ではあるが、暮らしながらいろいろな環境教育の体験をする。

その暮らしは、生活舎のある山の自然との長年の関係の中で、和田家の人たちによって築かれ受け継がれてきた簡素な生活、シンプルライフである。そこにあるのは、生活するのに必要な物であって、余分な物はない。都会生活を満たし飾る便利な物はない。私たちの普段の暮らしでは使わない物がある。簡素であることは、あ

る意味で「不便」である。その「不便」を感じながら数日滞在すると、「不便な生活も悪くない。」「いつもより食欲もあるし、体調もいい。」と感じたり、「東京に戻ったら、スマホを使うのを止めたい。」というような気持ちも起こってくる。つまり、くだけけ生活舎で体験する環境教育諸活動の土台にある農的暮らしは、これまでに学んだ環境教育をもう一度学び直すことに留まらず、私たち一人一人のライフスタイル、さらには社会で共有されている生活様式を問い直し受け止め直す機会となり、その大本に立ち返って環境教育を捉え返すことができる、と私は考える。

くだけけ生活舎でなされる様々な環境教育活動から、そのもとにある農的暮らしへと眼差しを向けてきたが、さらにその背後にあるものへと視線を向ける。生活舎で皆が集まって食事をする食堂には、大きな額が掲げられている。そこには、くだけけ会創始者の和田重正氏の次の言葉が書かれている。

いのちの世界では
たのしみの中にも
苦しみのなかにも
悦びがある

食堂は三食の食事はもちろんのこと、団欒の場であり、皆が集まる場所でもある。そこに筆で書かれたこの言葉が掲げられている。気がつけば、誰の目にも留まる。一度目に留めた者は、毎日、この言葉と出会う。

この文句を説明して、重正氏は人生詩集『無一可』（2007）の中で次のように述べている。

ここ（一心寮）へ来る人は自分が空気の中にいることに気づかないでいるのと同様、いのちの世界にいることに気づかず、物質と感覚と感情だけの世界にいるのだと思いつんでいられるだろう。そうすると、苦しみの中に悦びがあるなんて、思いようもないことだ。取って笑い、取られては泣き、奪って得意になり、奪われてしよげる、—ただそれだけの泣き笑いの世界に生きていたら本当の悦びなどは味わいようもない。・・・（中略）・・・この悦びというのは、空気を吸う悦びを感じるのと同じで、いのちの中でいのちをタダで自由自在に吸えるのだとな

ったら悦ばないわけには行かない。いや、本当言うと悦びということばを遥かに超えた、ただ満足—不足の全くない満たされた状態—こんなことをいくら言っても説明にはならないけれど、ともかく、大変ゆったりとした、不平も不満も何もない状態、別の言い方をすれば大宇宙いっばいに充満した存在、—こんなことは言えば言うほどおかしくなるからやめておこう。

いや、それでもまだ言わないでいられない。生まれたての赤ん坊が母親の乳に吸いついているあの姿。赤ん坊自身では満ち足りているとも、安心しているとも何とも思っていないに違いない、あの赤ん坊と同じ。われわれは、いのちの世界に安住している。ただそれだけなのだ。それを外から見て、悦びの状態だと評価しているだけだ、ご本人は悦びとも苦しみとも別段感じてはいないのに。

でも、そのただいのちの活々として存在する世界の有様を、もしことばという他人、に表現させれば、悦びともなろう。

そういう屁理屈は別として、素直に事態を表現すれば、たのしみも、苦しみも、いのちの世界に立てば、みんな悦び一色で塗りつぶされる、ということになる

(26-29 頁、下点は著者による)。

物質と感覚と感情だけの世界、あるいは泣き笑いの世界とは別のもう一つの世界。大宇宙、ただいのちが生き活きとして存在する世界、楽しみも苦しみもみな悦び一色で塗りつぶされる世界。これが「いのちの世界」である。

くだけけ生活舎では、周囲の山の自然と密接な関わりを保ちながら質素な農的 생활が営まれ、また環境教育の諸活動も行われている。これらは目に見える自然環境であり、そこにおいてなされる人間の営為であり活動である。対して「いのちの世界」は目に見ることはできない。しかしそれは、和田重正氏によって感じ取られ把握された実在であり、その実在を踏まえた世界観である。くだけけ生活舎の活動は、この世界観に裏打ちされている。この世界観のもとに展開されている。和田家の人たちは、この世界観を拠り所にして日々生きる人たちである。その人たちと、たとえ数日であっても共に生活し、様々な体験を一緒にすることによって、大学で学んだ環境教育をもう一度学び直すことができる、と私は考える。

なぜ「フィールド環境教育学」をくだけけ生活舎で行うか。上に述べた生活舎ならではの体験を通して、参加者一人ひとりが大学で学んだ環境教育をもう一度学び

直すことができる、と私は考えるからである。その体験とは、第1には、環境教育活動、野外体験活動、環境保全活動、環境に配慮した生活などの環境教育関連諸活動からなる複合的・総合的体験である。第2は、山の自然環境との関わりの中で営まれる簡素な農的暮らしである。この暮らしの中に第1の体験は根ざし、体験のもと（原型）となる出来事が生じる。暮らしが先にあって、そこで起こる出来事から環境教育的なるものが抽出され、環境教育活動に形成される。第3は、くだけけ生活舎が拠り所とする「いのちの世界」である。これが、第1と第2の体験の大本にある。第1と第2は、環境教育関連施設に一般的な体験であるが、第3にもとを置き支えされることによって、一般的な体験がくだけけ生活舎特有のものになる。第3の体験である「いのちの世界」は、くだけけ生活舎の原体験である。

V. おわりに

自然観察会や子ども合宿は、くだけけ生活舎が提供するいわゆる環境教育のプログラムである。山の再生活動や循環型農業は、生活舎を体験するために訪問する者にとってはプログラムであるが、そこに住み生活する者にとっては日常の仕事である。簡素な農的暮らしも、訪問者にとってはプログラムであるが、生活者にとっては毎日、繰り返される営為である。「フィールド環境教育学」ではこのプログラムと仕事を体験し、その基盤にある農的暮らしを丸ごと体験する。その暮らし自体は、環境教育と名づけられる以前に既にあるものであり、そこから様々な環境教育の活動が、ある意図をもって加工して取り出される。この暮らしと、もとなる出来事を、私は「環境教育の原石」と見なす。

この原石は、また「環境教育の試金石」でもある。試金石とは、『広辞苑』（第5版）によれば、「金・銀など貴金属片を磨（す）って、その面に現れた条痕の色と既知のものとを比較して、その貴金属の品位を判定するのに用いる石」、転じて「価値・力量などを判定する材料となる物事」のことである。「環境教育の試金石」とは、ある人が有する環境教育の思想、イメージ、経験、資質、能力、価値観、態度などを吟味するための素材である。「フィールド環境教育学」に即して言うならば、「環境教育基礎学」ならびに「環境教育実践学」を履修することによって得た各自の環境教育の理解を捉え直し、環境教育とは何かをもう一度考え直すためのフィールドおよびそこでの体験のことである。以上の論述から明らかなように、これがくだけけ

生活舎である。

くだけけ生活舎は、環境教育の原石にして試金石なのである。

謝辞

「フィールド環境教育学」を実施するに際して、「くだけけ会」の和田重良・一良氏を初めとする関係者の方々、ならびに「農場こぶた畑」の相原海・祐子氏に大変お世話になりました。記して感謝致します。

注

- 1) 原子栄一郎 (2008) 『『持続可能性のための教育論』(1998) 再訪』は、10年前に執筆した「持続可能性のための教育論」およびその後の環境教育に関わる自身の問題意識の変遷を記し、考察したものである。
- 2) <http://www.unesco.org/new/en/education/themes/leading-the-international-agenda/education-for-sustainable-development/education-for-sustainable-development/> 2014年1月19日アクセス。
- 3) <http://www.un-documents.net/a21-36.htm> 2014年1月19日アクセス。
- 4) <http://ja.wikipedia.org/wiki/環境教育> 2014年1月25日アクセス。
- 5) 環境教育に関する学習の位相については、原子 (2009) を参照のこと。
- 6) <http://www17.ocn.ne.jp/~kudakake/scikatu.html> 2014年1月25日アクセス。
- 7) 「同行教育」とは、「至らない者同士が互いに精進する姿。補い合い助け合っている『いのちの世界』で、それぞれの能力がひきだされてゆく教育の形」である。「人生科」とは、「人の徳性は、ベシ・ベカラズを教え込むのではなく、『自分とは何だろう』と深く味わい学ぶこと」である。この2つは、「100年先の日本をつくる基本理念と実践」として位置づけられ、くだけけ会の根幹をなす。<http://www17.ocn.ne.jp/~kudakake/katudou.html> 2014年1月28日アクセス。
- 8) <http://www17.ocn.ne.jp/~kudakake/gaiyou.html> 2014年1月28日アクセス。
- 9) <http://www17.ocn.ne.jp/~kudakake/katudou.html> 2014年1月28日アクセス。
- 10) <http://www17.ocn.ne.jp/~kudakake/scikatu.html> 2014年1月28日アクセス。
- 11) 今年度は4日目に、くだけけ生活舎から車で約30分の距離にある養豚場「農場こぶた畑」で、豚の世話や農場整備の作業を体験した。「農場こぶた畑」については、古谷 (2011) を参照のこと。

- 12) <http://oyamanotamago.web.fc2.com/kodawari.htm#3> 2014年1月28日アクセス。
- 13) <http://www17.ocn.ne.jp/~kudakake/katudou.html> 2014年1月28日アクセス。

文献

中央環境審議会, 1999, 『これからの環境教育・環境学習－持続可能な社会をめざして－』

<http://www.env.go.jp/council/former/tousin/039912-1.html> 2014年1月28日アクセス。

古谷修, 2011, 「地域循環を実践する小規模養豚『農場こぶた畑』」, 『畜産技術』, 678: 29-32.

原子栄一郎, 2008, 『「持続可能性のための教育論」(1998)再訪』『「持続可能な開発のための教育 (ESD) に関する総合的研究」研究成果報告書』(2004-2007年度科学研究費補助金(基礎研究(A)(1)課題番号: 16200046, 研究代表者・阿部治), 45-62, 立教大学社会学部。

原子栄一郎, 2009, 「環境教育による教育革新への見取り」, 『教育基本法、環境教育推進法に対応する環境教育カリキュラムの構築』(平成21年度 教育改善推進費(トップマネジメント経費)による「特別開発研究プロジェクト」現代的教育課題研究, 代表者・木俣美樹男), 21-28, 東京学芸大学環境教育実践施設。

環境庁, 2000, 『これからの環境教育・環境学習－持続可能な社会をめざして－』, 環境庁企画調整局環境保全活動推進室。

和田重正, 2007, 『無一可－和田重正・人生詩集－』, くだかけ社。